

プレ Dr. 吹 春

## 千葉菌類談話会以前のこと

翠田 丕

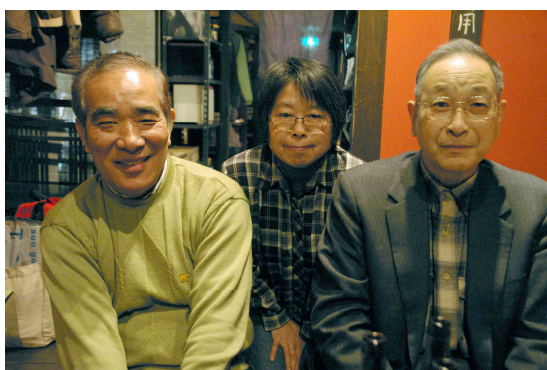
「拝啓 ご無沙汰申し上げております。過日は折角のお誘いを戴きながら折悪しく会の合宿と重なり、私がリーダーでしたために抜け出す訳にも参りませず、大変失礼致しました。今年は気温の低下が遅れたためキノコの出来はあまり良くないように感じられますが…」

私は40代に山登りを始めましたが、何時までも登山が出来るわけのものでもなし、キノコ狩りなどはと考えているところへ現れたのが、教育大の生物ご出身で、日本山岳会員、本職水質屋で、今は亡き上野英世氏でした。冒頭の一文は、氏が巨樹の会へ去り、別れの時の一文です。もう一人は仕事の上でも交渉の多かった高橋俊和氏で、これまたキノコを卒業、漢方医療にのめり込んでいき、どっぴりと漬かって今や大変繁盛している由。

綺麗だった富士山にキノコを採りに

定年(57)の3~4年前のある日、8月下旬に富士山へキノコ採りに行かないかという誘いを受けたので、即座に賛意を表しました。以来4~5年間、年に一度富士山参りとなりました。

富士山も今とは比べ物にならないほど綺麗でしたし、キノコの種類も多かったように思います。尤も8月の終わりという時期が良かったのかもしれません。初回に有料



翠田さんは写真の右端

道路の3号目あたりで全体的にクロハツのような形をした巨大なキノコを二千円で売っているのを見て、びっくりしました(オオモミタケでした)。お目当ては食べられるキノコ—ショウゲンジ、アンズタケ、ヌメリササタケ、アブラシメジ、ホウキタケなどでした。3年もすると、食べられる、限られたキノコだけでは、年に一度とはいえ、飽き足らなくなりました。また富士山の荒れ方も酷くなってきました。上野氏の指導もあり、進歩はあったと思います。しかし二人の先達も新たな道を進むようになり、一人取り残された感じでした。暫らくして、吹春さんに辿り着くまで無為な時間が過ぎました。

70過ぎに病を得てからは、いけません。歩くのがだめ、覚えるよりも忘れるほうが多くなり、目は老人目、おまけに指先も震えます。去年はキノコの写真は一枚も撮れ

ませんでした。

最後に、上野氏が自費出版した「森を楽しむ」の一節を紹介し、冥福を祈ります。

『ヤコウタケやツキヨタケのほかに子実体が発光するキノコとしては、アミヒカリタケが知られており、またヒラタケ、カワキタケ、カヤタケなどの子実体も光ることがあるといわれている。さらにスッポンタケの場合は、可視光線ではなくある種の放射線を出し、厚紙の箱の中に入れた乾板を感光させることが知られている。キノコには放射性同位元素、とくにセシウムをよく吸収する場合のあることが明らかにされているが、スッポンタケの場合も、あるいはそうした性質と関係があるのだろうか。』

キノコには子実体でなく菌系の方が光る種類もあって、中でもナラタケの根状菌系束の例が良く知られている。このナラタケの発光機構についてはかなり解析が進んでいて、細菌の発光の場合と非常に良く似た酵素の関与していることが明らかにされている。ただ小川眞博士によると、純粋培養したナラタケの菌系には、系統によってよく光るものとそうでないものとの別が見られるという。

こうした発光性の菌系が朽木の中に繁殖すると、朽木全体が光って見えるようになる。

この現象は、ギリシャの昔から知られており、またC・ディッキンソンらはその編著の中で、第一次大戦中兵士たちがお互いの衝突を避けるため、暗夜の塹壕の中ではこの光る木片を鉄兜や銃に付けたという話、第二次大戦中にもオランダ中部の激戦地に降下した空挺部隊が、塹壕を掘っている間に光る木の根に出会って驚いたという話、あるいはインドネシアでは夜のデートに出かける娘さんが、目印と装飾のためにそうした木片を身に着けるという話を紹介している。

この最後の話については、中野政弘博士が第二次大戦中に、ジャワ島中部のグヌンパテガ山地で実際に体験されたといわれる。博士の著書「黴」によれば、「インドネシアの乙女の髪に差しした木片が、かすかに燐光を発して光っているではないか。かの暗夜で艶然と微笑む明眸と皓齒に、この幽玄の光は一しおの風情を添えた」のだそうである。』

会員から

## 大地に「感同」を求めて

高橋 勝雄

私が初めてきのこを手にしたのは、昭和15年、5才の時でした。姉たちと共に1km北にある、通称新宿山と地元で呼んでいた、砂地の松林にショウロ、初茸、赤初茸、等々を採り、味噌汁の具にしたと思います。私達の村

の北東4kmでは海軍の香取航空基地の建設が行われており、昭和16年12月18日、太平洋戦争が始まると、新宿山一帯にも軍の施設が置かれ、一般人の立入が出来なくなってしまいました。



ムレオオイチョウタケと私（佐倉市, 2006年7月11日）

### 尾崎喜八の紀行文に深い感銘を受けた

私は高校を卒業し、地方で働いておりましたが、昭和32年に東京勤務となり、大都会の片隅で倅しい思いで働いておりました。そんな折、尾崎喜八の紀行文、「無生野紀行」に出逢い、深い感銘を受けたのでした。未だ高層建築物の少ない都会の西の空に赤々と染まった雲の中に黒々と横たう、富士、丹沢、甲武総の山並（脈）を眺めるたびに、山への憧れが強くなってゆくのでした。休日ともなれば、近くの山歩きが日課となっていました。そんな50年近くの低山山行の中で、一番初めに登ったのがK岳です。その理由は、尾崎喜八の「無生野紀行」を辿る素朴な峠への自然が、私の心を魅了したからでした。その上、自然からの恵みも、桑の実、栗、ぐみ、あけび、栃の実、野ブドウ、山梨（梨の原木）等と多くの果物があり、色々なきのこのことの出合いもありましたが、採集するのは初茸のみでした。そんなきのこの中で一際目立った大型のきのこ（後年ウラベニと知る）は印象深いものでした。

7度目の転職で山行が増え、きのこに関心が  
後年、私がきのこの世界に深い関心をもつ

てゆくきっかけは49才、7度目の転職をした後でした。その職場は土曜日が休みで、勤務も5時迄でしたので、山行きが多くなってゆきました。

私の住んでいる市には富士吉田市に大きな研修センターがありました。海拔1,000m、1万坪の敷地には唐松が茂り、体育館、キャンプ場等があり、幼稚園児～高校生迄の学修に用いられており、一般市民参加の行事も、四季を通して計画されておりました。

私が3度目に参加した行事は「秋の富士山のきのこを楽しむ集い」でした。市民約45名が、広いホールに集まり、現地職員によるミーティングに耳を傾けるのでした。翌日は残念ながら雨天となり、雨衣を着てのきのこ狩りとなりました。私は玉子茸、ハナイグチ、ホテイシメジ等を探ることができました。その後10回程富士吉田の行事に参加し、その都度、現地職員の撮影した色々なきのこの写真や文献を参考に、奥深いきのこの世界を多少なりとも知ることができました。

### きのこの世界を歩んでいきたい

定年後、毎日が休日となり、野山を歩く日も増え、路傍や林地に出生する小さな生命になぜか深い「感同」を覚えて行くのでした。

大地に求める小さな「感同」、それは私の知識では計り知れないきのこの世界でありました。何冊かの参考文献は手元にありましたが、自信のもてる食菌や菌名は何種もありませんでした。そんな折、ある雑誌に、この談話会の会員募集の記事があり、平成9年に会員の申込みを行い、今日に至っております。先生方を初め、会員の諸先輩に学び、少しはきのこの事も分かって参りました。今後とも色々な勉強会等に出席を重ね、きのこの世界を一步一步進んで行きたいと思っております。